

秋葉街道

秋葉街道の性格として、縄文時代からの塩の道、後醍醐天皇の皇子宗良親王の戦いの道、武田信玄が切り拓いた軍道が挙げられ非常に重要な道であった。北から入ると、諏訪湖南東の諏訪大社上社本宮付近から杖突峠^{つえつきとうげ}、守屋山(1,651m)麓、高遠^{たかとお}、中沢峠^{ぶんぐいとうげ}、分杭峠^{かしお}、鹿塩^{おおしかむら}、大鹿村を経て浜松市の秋葉山・秋葉神社に抜ける道である。江戸時代には「火防の神」^{ひぶせ}として全国的に信仰を集めた秋葉山・秋葉神社へ向かう参詣道として栄えた。

南北朝時代の興国 4 年(1343)、香坂高宗は宗良親王を大河原城に迎え更に、親王のために仮御所を設け庇護した。宗良親王は正平 10 年(1355)に小笠原長基^{おがさわらながもと}と桔梗ヶ原合戦(塩尻)を展開した。この当時、宗良親王と香坂高宗は北朝方との戦いに秋葉街道を行軍したのだろう。飯島の日曾利には香坂氏の屋敷があったが(現存)、大河原からは小渋川経由で、もしくは分杭峠及び折草峠経由で往来していたと推察する。飯島周辺の人々も、秋葉山・秋葉神社へ参拝するために、この秋葉街道を利用した。飯島から山を越えて大鹿村へ抜け、秋葉街道を南下するルートが一般的だった。

(川端紅葉著 2026・2・19)



「大鹿村」©2017.8 川端紅葉、 信濃宮：宗良親王の仮御所